

## 季題寸言欄復活に際し

(曲水7-16)

季題寸言は、数年前水巴先生が創めて作り出されたものである。早くからの社友諸君は御存じの事と思ふが、且つて「智仁勇」俳壇には先生初め諸氏の作品が時々発表され、次いで本誌三巻頃再び暫く此の欄を設けた事があつた。それを三度本誌に復活させる事になり担当を自分が托ねられた。自分はもとよりこの適者ではなく、この仕事には、花酔、玩亭、楽堂諸氏の先輩がある。が、敢て自分がこれを引受けたのは、季題寸言に就て、常に愉快なる期待を持つてゐた所以に他ならない。

改めて当欄復興に當つて、大体の処、季題寸言の如何なるものかに就て、充分の説明の必要があらうかとも考へるがさてその場合に立至ると、自分も遺憾ながら季題寸言の果して如何なるものかといふ事に就いては、まだ適確な真髓を掴み得ない。それ程季題寸言は創められてなほ日浅く充分な研究も積まれてゐないのである。思へば季題寸言は爾来不運な境に埋もれがちであつた。

が、また一面には、それだけ今後開拓研究して行くのに、すくなからぬ興味もあり励みもあるのである。我々の進み方によつて、季題寸言は果して如何なる内容を盛り如何なる表現形式を持つて完成されやうか、それは一に未来にある事で、自分は何等の予定も持ちたくない。たゞ自分は日本文芸の一区画によし小さくとも何等かの足跡を確と印づけ得ると信ずる者である。

季題寸言とは、今即座に考へたものではあるが、季題短章であり、また、俳短章と称して、大した誤りはないといつたならば、大体どんなものであらうかといふ事は、諸君の脳裡に想像される事と考へる。

何よりも先に、過去に於いて我々の手になつた作品から、その例を挙げて見やう。何れも前記二期の間に発表されたもの、中からの抜萃である。

### 椿

煤煙の落ちる上野の崖に椿が咲く。其の下を博覧会の工事に働く大工が幾人も通る。大工は咲いた椿を振仰がうともしない。椿はぼつたりと一つ花を落した。大工はそれを跨いで通つた。大工の小僧はその花を踏みつけて行つた。(玩亭)

### 海棠

骨壺を提げて火葬場の門を出る時、打ちつけるやうな烈しい風雨の中に海棠が咲いてゐた。(花酔)

### 躑躅

躑躅を足扁でない字に替へたい。(碧雲居)

### 同

咲き誇る躑躅の花は生蕃人の兜にい。(水巴)

### 木蓮

木蓮の花は裸の人が舞扇さつと開いたやうだ。(玩亭)

### 寒菊

寒菊と。親を尋ねに廻る阿波の鳴門の順礼のおつる。(玩亭)